

# 伊那谷における不二道・実行教の展開

続「三河民権国事犯事件と飯田地方の自由主義思潮」(中・第二章、四節への加筆) 北原 明文

A Study of Mikawa Uprising and Iida Democrat In the Meiji Period. Vol. 4. by Akifumi Kitahara

## 一、愛国正理社と下伊那地方の実行教

前稿において、伊那谷の民衆世界の動向を自由民権運動の視点から点検した。その際、江戸期に民衆宗教として不二道が興り、それが当地へ流入した経緯、またその後身である実行教が、さらに近代の民権時代にも盛んに活動している実態を明らかにする必要があるように思われた。本稿ではその様相を追ってみたい。

明治一五年から飯田町に寄留した愛国正理社長桜井平吉(柳沢武貞)の行動は、元来金当地に勢力をもっていた実行教講徒との間に、静かな対抗関係が生じていたものと思われる。桜井はそれを意識しながら、一方ではその影響を受けていたであろう。

例えば愛国正理社は設立二年目の一七年(一八八四)に一部三階総二階の社屋を建てている。ここには先の一四年に江戸町に建設された実行教(実行会社)の荘重な会館への対抗意識が伺えるのである。また、愛国正理社規則の中には、先行する「実行教信徒心得」

を後追いしたような、類似の規定が見られるのである(1)。

第一条、本教ニ信入スルモノハ誓言書ノ旨ヲ躰シ記名捺印管長

ニ呈シ印鑑ヲ申請クベキ事

第二条、他出旅行必印鑑ヲ携帯シ互ニ相示シ隔意ナク交際スベ

キ事

第三条、左ノ木標ヲ門戸ニ掲クベキ事(三号ニ図ヲ出ス略之)

この実行教「信徒心得」第二条に追隨するかのよう、正理社則第六条にも、同じく旅行の際の手続き規定がある。

また同様に、「信徒心得」第三条「木標ヲ門戸ニ掲クベキ事」の項についても、正理社則の欠落部分には同じものがあつたようだ。即ち、正木啓二著『東海と伊那』には阿南町御供の三浦宅に「愛国正理社」の表札が残っていた、という証言が載っている(2)。

また同書には、実行教の講徒の場合、戸毎に「実行社」の銘の入った縦二四・五cm、横一〇・八cmの表札を掲げていた、とある。ここには、両社の間の静かな対抗意識が読み取れると思う。

## 二、富士講の御師（おし）角行と参行（実行教の源流）

伊那谷の幕末明治期の思想状況をみるにあたつては、先ず平田篤胤が、『古史伝』の中で江戸後期の書『角行藤仏傳記』を参照して、富士講やその後身の不二道について述べていることを手懸かりとしたい（3）。

この『角行藤仏傳記』は富士講の始祖、公家の出の長谷川角行の伝記である。本書によれば、彼は戦国乱世に生まれ、一八の歳に統一政権のないこの当時の人心荒廃した世相を憂えて旅に出た。当初彼は東国、奥州の岩屋で修行を行っていたが、やがて駿河の不二「仙元大日神」のことを知って、その富士山西麓にある人穴に入つて修行を続けた。そしてそこで入滅したという。

ここに角行を祖とする富士山（麓山）信仰が生まれ、やがてそこには教義と呪術が形成され、その人穴は聖所となつたという。こうして、富士山の裾野には角行を師と仰ぐ修験者たちによる「講」の集団が形成されたのであつた（4）。

修業者たちは山の登り口や里の辺りに住み、ここを訪れる民衆の病氣治癒など現世のご利益を求める願いに応えて加持祈祷を行い、また御風世喜という護符などを配つて暮らしていた。

例えばそんな一つに「御身拔」がある。これは、行者（角行が神（仙元大菩薩）と一体になって、己の身から抜き取つた「神意」を絵や文字で短く記した、床の間の軸物である。

こうして富士山信仰は当時広く普及して隆盛をみた。そしてそ

れ以後も幾度かの分派別れを繰り返しながら、その都度勢力は拡大し、新しい分派が生まれている。「富士の八百八講」とは、このことを指した言葉で、それらは何れも呪術的なものであつた。

ところが、そのうち江戸町人出身の日旺、旺心、月旺、月行に相伝された一派は、元来の山伏の宗教という性格が次第に変容して、民衆の実生活に即した信仰へと変化していったのである。

享保期の人、食行身祿（伊藤伊兵衛・一六七〇―一七三三）は伊勢の農村に生まれた。一三の歳に江戸に出て、一七歳にして別立五世月行に師事して富士講の信者となつた。しかしその後も、世俗にあつて誠実に油売りの商を続けて、着実に富を蓄えていたという。

即ち、彼は勤勉に家業に励む者には富（利潤）が蓄積されるという世の仕組みを卑しいものとは考えていない。むしろ、そんな民衆の感覚を彼らと共有しながら、信心を深めていたのであつた。やがて彼は仙元（富士）大菩薩の啓示を受けて、財産を縁者に譲つたが、しかし油売りを続けながら熱烈に布教を行なつていた。

そして彼は、巢鴨の自宅の前に高札を立て、「身祿の世」（歎勤の世）の到来を予見している。人々はそんな彼を氣違身祿、乞食身祿、油身祿と嘲笑した。しかし彼はこんな思いを抱いていたのである。

一字を開き御ぜん（前）より三日のからだんじき（空断食 仕り御礼 申し上げ候。これよりしては身祿の御世、御山の御名も参明 藤開山と御代り御極り被<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>遊候間、萬法の御みな世へ御伝ふおき申御事……）

この当時の江戸には飢饉や物価高騰が起こり、一揆や打ちこわしが頻発していた。この時彼は人々に向かつて、今は身禄の世の到来に相応しく「生活規律」を糾すべきであると訴えている(5)。

この食行の思想を宮崎ふみ子氏の「不二道の研究」「不二道の歴史観」に照らして、彼が自ら身禄と称した所以を述べてみたい(6)。

食行は諸人救済(衆生済度)を願つて、富士信仰に内在する農耕神信仰、山頂浄土観、ミクロ世観、それに民衆の間にある道徳を加味して、これを再編統一し、新しい思想を打ち立てたのであった。

彼の思想は、開祖角行以来の修験者が理想とするミロク世観を継受している。さらに自分が農商の道に従事しながら到達した仙元大菩薩(淺間大日神を角行はこう呼ぶ)への信心を基にして、誠実に勤勉に日々を送るための実践道徳を四民に勧めるのである。

やがて彼は、富士の七合目烏帽子岩において三十一日の断食を行い(入定、享保一八年(二七三)七月に入滅したのであった。

次に彼の『一字不説の巻』と『三十一日の御巻』を引用する。

○日本扶桑國と名付る祭事、桑を以餓を助る事はるかに隔り、不二山は一切のあ(ら)ゆる種のもとふらせ、穂おはらみ一粒萬ばいとなる。はお以つて人間食物となしたもふ事は、仙元大菩薩月日様の御慈悲と聞き能々一筋に信心第一也。(六月十三日)

○天地の祭りに叶たるは、土農工商の四民なり。入渡り相助けに其働を以、万物を調るの本也。其司取四民の内、位官高禄を請し人、無位無官の下つがた迄、元一体也。凡、千疊の床樂しむといふども、身置所一疊にしかじ。萬石の宝蔵に満といふども、喰の一字也。(六月廿三日)

○人の鉢と米の鉢と道理也。五穀菩薩之内にも米は真之米様也。

○藤(ふじ)仙元大菩薩の御真伝之儀は無知無字をゑらます。只今日様の御修行被<sub>レ</sub>遊候へり。子にふし寅に起、天子將軍様大名小名平人に至る迄、其身にそなわりし家業第一にして、我より上父母をはいし、我より下は慈悲を下し、重きも軽きも堪忍の中に住居にて、正直情不足を守る事、是を第一生之心行とする也。

(一、二段は『三十一日の御巻』三、四段は『一字不説』)

食行が富士山七合目で入定したことは江戸の瓦版に載つて評判になった。これを契機に彼の教えは江戸と関東、東海、甲信など、富士の麓やその山を遠望できる近在の地はもとより、遠くは九州にまで伝わっていったのである。

このように、食行身禄の説く教義は従来の様な富士山に関わる加持祈祷とか呪術的なものではなかった。むしろ日常生活における普遍的な実践倫理を説くものであった。

そしてそこには、教義を中心に町人・農民一人一人が結びついた「講」共同体ができるのである。

伊那国学の家系に繋がる市村咸人は、この教義について、食行作の「誠かな道あらたまのみ代となり、閑も戸のあく不二のすそはら」という和歌に親しさを覚えて、次のようにいつている。

即ち、「これは民衆の平等であるべき原理を知つて、無縁の遊民を戒め、正業に就くべきことを諷詠したもので、一百五十年前、既に文化は平民階級にまで及ぶべきこと―明治維新―を予言したものであると考えられる」と(7)。

こうして富士講大五世 別立六世 食行身祿は、富士講中興の祖といわれた。以後の一世紀間には食行自身が人神にされた事もある。それは、「食行の御書物は俗語には候へ共、肉眼にては分り難き事共多きゆゑ」、ひたすら崇められていたからであろう。

そこで、この難解な部分を民衆が「聞き安からんために和らげ」る役目を担って、新しい御師（おし）たちが登場するのである。

新しい御師の目行や参行たちは、食行の教えをそれぞれの理解と解釈によって解き明かし、それによって己の派を形成して、次第にその輪を広げていくのである。

その中で、後の「不二道」へ繋がる流れは伊藤参行による食行神学の継受であった（8）。

参行の説くところによれば、食行はこの世を四万八千年余のものと考えて、それを三分して次のように説明している。

即ち、最初「此世初て六千年は南無ちちはは様の御支配」が行われている。続いて「夫より一万年神代の影願い（人の心の持ち方）」の世がくる。そして「残る三万余みろくの御代」である、という。

まず最初に世の支配を行なった創造主「元のちちはは様」は、富士山の神格たる「仙元大菩薩」を生んだ絶対的権威をもつ夫婦神であり、この世が泥の海のとくに富士の山腹から生まれた。

この神は日本の地を固めて万物を作り、そこには男女五人づつの人間と三粒の米を生み、その大地に人間の子孫が広がった。

その六千年後の「神代」の支配者は、元の父母と仙元大菩薩の下「御身の御手あしの役人」である天照大神宮である。この神

は「月日さま（日月星を三光とよぶ）の御子分に被<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>て國を整えた。

この神は「今の元禄時代には諸々の神仏が作られた」その中の一つであって、人々はその像の影に己が現世の利益を願ってきた。

そして、ここに語られているミロク（理想世）観によれば、元禄元年六月一五日辰の刻には神代が終わり「ふりかわり」が起こる。

この「ふりかわり」によって一万年間の神代が終わり、天照大神宮は役人としての「御役目お御取り上げ被<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>遊」される。

さらに「残る三万余みろくの御代」には、南無仙元（富士世）大菩薩様が衆生を助けて下さる、との「御伝ふ」があつたという。

かくして、そこには食行身祿自身がミロクの化身となつて、この世へ救世主となつて現れる、というのである。

参行の場合は、このような食行の神学を受け継いで、これを彼の流儀で陰陽の均衡の変化から「世」の交替を説明している。

彼は、世界の運行と生成を陰と陽の相互作用であると捉える。即ち、彼はここで陰陽五行説を借用し、「男は陽にして火なり。女は陰にして水である」、というのである。

しかし元来陰と陽とは優劣がない。この二つは元の父母の世には調和していた。ところが神代においては陽が尊ばれて陰が卑しいとされた。そうなれば男は猛火となり、女は洪水となつて、元禄元年六月十五日には世の破局を迎えるところであつた。

しかしここに仙元大菩薩の哀れみ、即ち「ふりかわり」が起こつて「女綱男綱」は繋ぎ直され、破局は回避されて神代が終わる、というのである。

神代にはかように男女の間に陰陽の不調和があつた。しかし次のミロクの世界には「陰陽の均衡」が取り戻されて、労働における男女の協力が実現し、夫婦の間によき子が恵まれて、そして土農工商の身分の間に平等が実現する、と参行は言うのである(9)。

さらに参行は、「夫士農工商の四民の道と申すは、此世界東西南北とひらき初て人倫盛んになりしより・依て四民四方より君を守護、各々備りたる家職を勤て行業とする」という。即ち四隅にある四つの身分が、「君」を守りつつ自分の家業に精進すべきであることを説くのであつた。

このように身分の平等をうたう新興宗教は幕府寺社奉行の取り締まりの対象となるのは必然であつた。しかし彼らの勢力は拡大し、お上に対して何度も自分たちの宗教の公認を求めている(10)。

### 三、不二道の三志

その後、中興の祖食行の教えをもっと純化して、一度は分れていた富士講の村上派と身禄派を一つにまとめ、これを継承したのは日光街道に近い鳩ヶ谷の小谷三志であつた。彼は食行と巡り会つて、その志を「二つなき道」とし「不二道」と呼び、これに最も近いものは孝であるとして「不二孝」ともよんでいる(11)。

この小谷三志禄行については、市村威人著『伊那尊皇思想史』の中に簡素な紹介があるので、引用をしてみたい。

それによれば「小谷禄行。禄行は武州足立郡鳩ヶ谷の人、通称

庄兵衛三志と号す。始めは不二に登山して修法を怠らなかつたが、此の如き難行苦行は世道人心を益し國家に貢献する所以にあらず、他に真面目なる改組の正法を伝ふるものあるべき筈であると、熱心に其の人を搜索したるが、希望むなしからず、不二道統第七世参行が江戸山谷に、かくれ住むを聞きて、之を訪ねゆき己が志を述べて其教を受け、参行の著書と共に、第八世の道統を受け継いだ。角行に創り食行に興りたる不二道統の大成者は禄行であつた。

さらに、「禄行は心身共に健剛にして行徳完備し、四十有余年間、四方を遊説して五畿七道を以て子弟を誘導し、至る所に忠孝を説き力行を勤むることに寧日なく、其教に化するもの十万余人であつた」と続ける。そして本書は、三志の門弟の農民たちが二宮金次郎の報徳教の復興事業を推進したことにも触れている(12)。

三志の教えは先師の書物に依っていたが、天保元年(二八一八)、彼が六六歳からの教えが和讃に残っている。この和讃は、筆先を下にして腹を上にする「天地振り変り」の筆法で書かれている。

また彼は、着物も左前に着るような逆の発想を行なつた。そして富士の頂上を逆に廻り、また御中道も逆に廻つたという。

彼は食行身禄の教えや参行禄王の四民平等論(『四民之巻』)である「陰陽優劣なき和合」論を発展させるべく、「天地振り替わり」論法などを用いて、常識を逆さにして日常の倫理を説くのであつた。

例えば陰陽説における陽の優位を逆さにすると、武士に対する農商工の優位に転じる。これが三志の「優劣なき和合」論である。そしてこれが彼の四民平等、男女平等論となるのである。

その上で、三志は個々人の自己救済のためには「儉素勉勵」(篇胤『古史伝』による)や家業精勤、孝行和合など、内心の精進によってそれぞれ人間的な成長を図るべき道を説いているのであった。次に掲げるものは三志の『不二孝教』の一節である。

不二孝と申せば、講中を取り立て、金銀を取り集め大々講、神酒口中などのように参詣するにもあらず、不二孝とは二つなき孝と教える。此五体揃ひたるからだを、御あたへ被下候かりの父母様の高恩を説き教え、夫より段々と其元へたづね入り、月日仙元大菩薩、元の父母様の高恩、天子將軍様の日夜の恩、高恩に預かり奉る所の御恩礼申し上るなり

また和讃の中では、大自然と人の力を「○天地ノ慈愍無クンバ万物育成アラズ・・○神仏の擁護ナクンバ諸災降伏セス・・」としている。

そして彼も開祖角行が憂えたように、戦国の時代には武将たちが民の暮らしとその心を荒廃させたことを悲しむ。

しかし天下の統一の果たされた今は、天皇の下で征夷大將軍が火の見櫓のような高所から、泰平の天下を導いている幕府政治を恵みとして、民には天子、將軍のご恩を次のように説く。

天地の慈悲で日々にほどよく暮らすうき嶋に

天子御武家のなかりせば、國の定めも野も山も

津々うらうらに至るまで、村里はじめ田畑も

畔淵無しにうばいやいきりとりかりとりおさえとり

昼夜やむせはあるまいぞ・・・・・

彼の和讃に残る平易な言葉に接した各地の人々には、これに共感して不二(道)孝の講徒となる数が増えていったのであった。

次に「お種初恵み合い和讃」の一例を上げてみる。これは後の明治三〇年代に作られた、茨城県利根町に残るものの断片である。

・・諸々村々の御同気が／難儀を共に思へやり／救わんものと一筋に／真をこめたる御慈悲の／情けは人の為ならず／

御恵み受けし月と日の／御実を分けて与えんと／日々の食事や酒煙草／質素を守り儉約し／余徳を積みし種初は／

預けて一粒萬倍の／身祿の真の御種まき／五穀成就の元作り／実に父母の玉ものぞ／何に喩えんありがたさ／

是を頂く人々は／疎かにすな心から／善きも悪しきも身に来る／皆々天地のおかりもの／家々子孫へ伝へおき／

萬却御縁の尽きぬよふ／御恩報じをよく勤め／

(13)

講徒たちは、天子、將軍や父母の恩義を念頭におき、「同気」(即ち「同志」)らと日常の生活倫理を実践し、また農耕技術の改良や、灌漑事業の推進などを共同で実行することを生き甲斐とした。

さらに三志は、將軍の恩恵に対する「報恩」として、徳川將軍日光社参の折には信徒たちが勤勞奉仕を行った。

岡田博稿「実行教と不二(道)孝心講」によると、三志の晩年から、不二道の講徒たちは土木事業への無償参加をはじめている(14)。

これは「土持」と呼ばれて、当初は小規模でおこなわれていた。しかし三志没後四年目の弘化二年(二八四五)以降は、門下の者たち

が三志への報恩と世のために、その教えを実践すべく、「隠徳を陽徳へ」と転じる「振り替わり」を行なった。

これは富士の霊山における「行のみありて徳なき難業苦行」なるものを転換して、「行徳を兼ねた道」として始めたものであった。例えば、後の明治六年のことであるが、武蔵川口の船着河岸工事の際に、三千人余の不二道の同気たちが、浦和監獄の囚人とともに八日をかけてこれに参加しているのである。

また同一一年の埼玉県庁付近の外郭工事には、囚人と共に不二道の同気数千人が参加して、県令白根多助を感動させた。

白根はこのとき同気の折原友右衛門に「至誠報国不二道孝心講」の幟をあたえた。以後これが不二道鳩ヶ谷派の正式名称となった。

しかしこのような通俗道徳は、四書五経からの学びを精神の柱に据える知的な儒者・学者は、当然邪教視したことであろう。

また彼ら信徒たちは藩の境を越えて種籾を交換しあい、品種改良を試みるなど、藩の秩序を乱し兼ねない交流を重ねている。

そののみか三志は「関の戸の開く」長崎へ出かけ、清人とも接触し、親しい者へは開国の必然性について書き送ったりしていた。

文政元年（一八一八）年、三志は京に上つて参内し、当時斜陽であった公家と交わつて不二道が公認されるために奔走しているきつと三志には、高貴な人に対して不二道の同気衆生は決して卑しい心を抱くものではないという自負があったと考える。

また、高い身分の者にも庶民の信仰を受容させ、自ずと將軍に巻物を「開かせる」ことを目指していた、とも考えられている（15）。それ以来二〇年、彼らの京都通いは効を奏して、三志は「重き

御身柄」の公家徳大寺右大臣家出身で当時醍醐理性院の僧であった行雅（三行・入信七年）を、後継者第九代教主としたのであった。

#### 四、不二道の分裂

三志は天保十二年（一八四二）、七七歳で没した。その六年後、不二道の内部には派閥抗争が生じて、分裂の兆しがみえた。

その際行雅は、「不二孝」を「不二道」と改めた。さらに幕末・明治維新を経て、徳大寺の支持派の者は不二道を神道化する改革を行なったのである。それは不二孝道分裂への道であった（16）。

ところで弘化四年（一八四七）、信徒数名は幕府大目付深谷遠江守の駕籠に「不二道御取り用い願ひ立て」（公認）の上诉状を行った。

これは、將軍に食行身祿の「三つの巻物」を献上して、これを將軍が上読された時には國が治まり民に平安がもたらされ、ミロクの世が到来すると信じた行動であった。そしてこれが寺社奉行の取調べを受けた時に内部の亀裂が拡大していったのである（17）。

三志存命中、鳩ヶ谷においては、このような「上読を願う」方法ではなく民の力を結集して將軍が自ずと巻物を「開く」目を持つことを上策として、先ず京都の公家への宣布を行なってきた。

今回の上訴事件をきっかけにして、京都では先師三志の晩年のいき方を逸脱であると批判して改革論が出た。例えば三志の「陰陽優劣なき和合」論は「氣」の次元のことに過ぎないのに、これを誤って現実的な「体」の次元のこととして説いている、という。

このような京都の（行雅の）不二道改革論を支持する者には、伊那の松下千代や長崎の人柴田花守ら神道に接近した者たちがいた。一方鳩ヶ谷派の六行（先師の息子）ら三志崇拜者たちは、京都派の「改革」の方針は同教の変更であるとして、これに反発している。やがて前記の上訴事件は、結局神社奉行筋から富士講禁止が発令される、という結末を迎えた。

こんな中で、京都派の神道系柴田花守やその弟子の西川須賀雄らは、三志の行過ぎた教えはその一代限りのものである、とした。さらに柴田派は、角行、食行、参行らについてもその名のみを尊び、彼らの「仏くさきこと」は払拭して、もはやそれらの教義は無用のものとしたのであった。

#### 五、神道実行教（18）

さて、維新後に新政府は神道国教化政策を採ったが、その際に行雅は還俗して徳大寺完璽と称した。即ち大徳寺は明治七年に「本教を離れて神道に改革するを以て退く」ことにしたのである。

このような動きは、関東の三志直系の者たちにとっては亡き先師からの逸脱であり背信であるから、なお反発を強めていった。

一方柴田花守らは東京に出て実行会社を興した。彼は不二道に平田篤胤流の古道思想を取り入れ、また京都の公家と接触を重ねている。こうして一五年には、神道実行会社が成立したのである。

この柴田の会社には、鶴殿正親（三志の外孫）や信州伊那の原九右衛門、小島の池内市右衛門ら地方の豪農らがその幹部となった。

かつて三志は「天子よりも上の神」のことを説いたが、柴田は復古に維新が実現した今の世に、それは迷雲であった、とする。一方鳩ヶ谷では、やがて（一八六六年）六行が没してからには教義論争は止めにし、専ら御國報じの行である道普請、河川修復、堤防高上げ、新築造工事など建設事業への無償奉仕に焦点を移していた。その世話役に当たったのは各地の土持の推進者たちである。明治十年代には、柴田花守の『本教大基』や『四民教論』など数冊の著書が整った。次に実行会社は教会所の建物を探して、牛込の井上穀の売り地五〇〇坪と建物を八一四円で取得できた。そして花守は神祇省「補少教正」に昇格した。一五年（一八八二）には実行教も教派神道扶桑教会、出雲大社教と並んで独立した。初代管長に不二道十世花守が就き、以後管長は世襲とされた。

#### 六、伊那谷の不二道（概要）

市村威人著『伊那史叢説』第二編（以下『伊那史』と略称）には、実行教に関して「松下千代」と題する一〇節の講演が載っている。

ここには神道ロマンティズム濃厚な言葉が多いが、再び時代を遡り、その中から伊那谷へ不二道が伝播した史実を拾ってみた。

かつて三志は京都への往復に中山道を使ったという。その途次、また信州や諸国巡りの際には、彼は実行躬行を以て人々を教え、忠孝を説いて家業に精出することを勧めながら布教をおこなった。

その時期に小島郡の池内市右衛門や伊奈郡の松下治助、千代夫婦など、後年神道実行教幹部となる人々が入信している。



文政八年（一八二五）の頃と推定される。禄行三志は諸国遊歴の途上、信州飯田町の谷川橋近くで淋しく菜を洗う松下千代の姿に目を留めて話しかけた。その夜彼女は伝馬町の宿鶴屋に三志を訪ね、家庭の悩みを打ち明ける。そして彼女は三志の説く孝道の話に感銘し、一家を挙げて不二道の教えに帰依したのである。

彼女は明治五年（一八七二）に七四歳で没したが、その碑文には柴田花守の筆によって次のようにある。

（文政）十一年小谷翁の門に入りて教義に思いを深めしより、不盡峰（富士山）に旭を拝て天津日嗣の御栄を祈ること八度、郷里に大宮を拝みて安御代の御禮申上ること貳拾壹度、霜さやき永閉つると雖も朝毎の灌水欠くことなく、照りはたゞき汗おつる夏日も家の業忘ることなく、其心掟の正しきは遙かに壮夫に立ちまさり、國々を廻りて所傳の要旨をひろめ、里々に至りて社友の懈怠を誡め、一向に道の興隆に心を盡くし、かば皆師と仰ぎ親と頼みて其説を信じ其導きに従ふ。

当地には、弟の賭博癖に苦しむ下川路村の代田芳兵衛、駒場村の浪人岡庭栄助、長野原の小林保太郎らが千代によって改心した逸話や、栗矢村の豪農原九右衛門らの入信のことが伝わっている。

不二道は家庭における個々人のあり方や役割を説き、その社会事業は土地改良や農産物品種改良の共同作業にまで及んでいる。

例えば千代は、一家の主人、主婦、子女、老人、雇人それぞれが「特殊な行事」を決めて、それを実践することが「天地の恩頼に報ゆる所以である」、ということ信徒たちに説いている。

その行事とは、御弘め（宣教）、万事慎み、腹立ちの我慢、毎朝の水行、縄ない、毎朝の塩菜撰取、酒断、煙草断、また老人や幼児に対してそれに応じた「行」を実践することを指している。

また、千代の感化を受けた飯田松尾町の庄屋岩崎新三郎の妻きんは、女性のたしなみである「一言一行」なるものを残している。これは、きんが老いてから嫁に与えた教えであるという。

それによれば、女子の縫針の芸能は扶桑国の本理であり、争わず我慢に止めて、怖ろしき心根、羨み嫉む心、摆嫌いなどを捨てて、「人来る時は上中下男女に限らず、不丁寧の挨拶なきように、誠に月日の御照し被遊候ごとく、只何事もへだてな」い心で他者に接することを説いているのである。

伊那谷における不二道の影響は、鳩ヶ谷に残る関係史料の中にも断片的に残っている。例えば全国的な種籾交換・品種改良事業に参画して、遠方と交流していたことが散見される。

このことについて、前掲『伊那史』には、千代が尾張國あさから邑の木綿屋定助や伊勢國多気郡色太村の老農清助らから種籾の薄蒔き法を教わって、これを今田村（生田）の治部右衛門が八年がかりで試作したところ成果が上った、と述べている。

これによる増収は、明治二七年には日清戦役の際にはその一部を恤兵部に献納し、また二八年の飯島村の大火の際の救援物資にも使われた、という。

また千代は麦田に排水溝を作る方式を普及させた。さらに土間の竈（かまど）を改良し、熱効率のよい用具に直して普及させている。

また当地の不二道の土持事業としては、明治中後期の生田村部奈の疎水開鑿や、後に触れるように、阿智川筋の伍和村恩田疎水の開鑿の事業などがある。

さて、千代は幕末の京都に上り、御所御礼とともに徳大寺行雅のもとを訪れてその教話を拝聴し、天使様のお茶碗などを拝領した。『伊那史』にはそれらが目録になって載っている。

さらに、明治期には宮城改築の際に労働奉仕に参加した。こうして伊那谷の実行教も神道化は色濃いのものとなっていた。

#### 七、平田篤胤著『古史伝』にみる富士講、不二道

伊那谷では、このように幕末から当地の不二道の講徒の尊王派の人々が、実行教徒になった。そして彼らは、当地で隆盛の平田国学の神道系の豪農層と合体して行動している（19）。

さて実行教の源流、開祖角行は、子弟三人らとともに「皇國は萬國の宗國にして富士山は地球の鎮守たる旨」を悟った、という。

一方篤胤は、富士嶽について『古史伝』三十一之巻の後半の中の『古史成文』『百四十九』の注釈において次のように述べている。

皇國は萬國の元首たれば、富士山は特に皇國の鎮なるのみならず、全地球の鎮とも云とつべし

ここに、平田学における皇國思想の中核が、不二道・実行教の信仰の中枢である富士の嶽と重なっているのを見るのである。

また篤胤の文には、「富士も喜拉（ヒマラヤ）山などに比ぶれば、

遙に卑かりなどと思」うかもしれないが、しかし例えば國は廣狭によつて美惡が決まるものではない、とある。そして、同じく山も高低によつて尊卑が決まるものではない、というのである。

そして、この尊き日本の富士山を仰いで「富士山に登る講社ありて、晩近（チカゴロ）殊に廣く流行（オコナ）る」として、不二道（後の実行教）の講徒たちのことを述べているのである。

さて、伊那谷では平田学派の人々は、明治二〇年前後に平田篤胤の遺著『古史伝』三十一之巻を出版する土木運動を興した（20）。

その際、当地の実行教講徒の中の知識層はこれに参画して、『古史伝』の第三十一之巻の部の上木を担当しているのであった。

同書三十一之巻の末尾には「○門人井上頼圀云、此巻を櫻木に彫せたるは信濃國伊那郡なる、実行教會員なり。」と記されている。両者はこのように、『古史伝』復刻の事業を介して一体となっていることが分かるのである。

#### 八、明治中後期の伊那谷の実行教

正木の著書によれば、飯田の実行教徒は明治一四年に五千円の講（半額掛け捨て）を作り、翌年江戸町に実行会館を建てた（21）。

同教は郡内を一二の区に分けて各区順番に月並み会を開き、教義を学習した。下伊那の教長は伍和村の豪農原九右衛門であった。阿智川を望む伍和の高台にある栗矢村では、明治三六年に原久右衛門を中心に、山向うの井水をサイフォン式工法によって同村

の備中原に引きこむ灌漑事業を敢行させている。この恩田井水の工事によって、この一帯は水田など耕地が拡大したのであった。

そこでは豪農の指揮の下に工事のための講が組織され、集落内の家々の多くが、このとき実行教の講仲間に加盟した模様である。

また、阿智川を挟む対岸の中馬街道筋には駒場村がある。当地の熱心な講徒矢沢淳三は、明治初年に新設された小学校の教育事業を献身的に支援して、学校に新しい教材を寄付した。(22)

彼らの日常は、祭りを主催する名望家の大屋敷などで、日を決めて教義を学んでいる。これは集落内の各層の農民が善意と信心によって一つに結束する組織を形成していたものと考えられる。

長野県では、伊那郡の大瀬木、駒場、伍和などの諸村、および小県郡長瀬村において、村内の有力な豪農のもとに、この実行会社の堅固な講組織が形成されていたことが確認されている。

#### 【本稿の註】

- (1) 上田市長瀬・池内家所蔵『明治十八年認可、実行教々規』『実行教信徒心得』より。
- (2) 正木啓 著『東海と伊那』参照。なお、本書の『近世』第四の「不二教から実行教へ」と『近代』第三の「実行教との対立」の記述は、伊那谷の実行教を扱っている。また富士道から分かれた扶桑教について、同書は『地理学研究』三二巻八月号を使用して、扶桑教は明治六年浅間神社宮司が復古神道の教義を取り入れて創始したが、明治一七年に丸山教と改称し、一五年ころから伊那でも布教が行なわれ、各村には講社が設けられ、富士山と日の丸を祭っていた、と紹介している。
- (3) 『角行・』は安丸良夫他編『民衆宗教の思想』(岩波『日本思想体系』67)を参照。
- (4) 当初の『講』は、後の「不二道孝心講」における信徒の講の原型であろう。

- (5) 安丸良夫著『日本の近代化と民衆思想』(平凡社ライブラリー)参照。
- (6) 宮崎ふみ子『不二道の研究』(『まると叢書』第四集)。なお、鳩ヶ谷市の古文書、『まると叢書』は上田市丸子長瀬の鶴殿家所蔵本を使用させていただいた。
- (7) 市村威人著『伊那尊王思想史』(一九三六年)。本書は島崎藤村が『夜明け前』の執筆に際して参照した一冊である。

- (8) 宮崎ふみ子『不二道の歴史観』(平野栄 編『不二・浅間信仰』民衆宗教史叢書16)。
- (9) 『不二道基本文献集』(鳩ヶ谷市の古文書・第四集)。
- (10) 『不二道願立御札に付御答書』(鳩ヶ谷市の古文書・第一集)所収。
- (11) 岡田博『実行教と不二道孝心講』(平野栄 編『民衆宗教史叢書16』)。
- (12) 『不二道孝心講土持御恵薄』(鳩ヶ谷市の古文書第六集)の二宮尊徳書簡参照。
- (13) 『不二道農産物品種改良運動資料集1』(鳩ヶ谷市の古文書・第三集)所収。
- (14) 『至誠報国不二道孝心講土持御恵薄』(鳩ヶ谷市の古文書・第六集)所収。
- (15) 角行以来、衆生の平安を求めて天子・将軍に正しい政治を説諭する書が著された。
- (16) (11) 岡田博『実行教と不二道孝心講』による。
- (17) (8) (10) によれば、食行身禄は政治を糾すべく著述した『一字不説の巻』『三十一日の御巻』などで、天子将軍がこれを閲覧する日の来ることを期待している。
- 『三十一日の御巻』には原本が三種あり、筆者未見の一つが岩科小一郎著『富士講の歴史』(名著出版)に収められていることを田中義氏から教示いただいた。
- (18) 宮崎ふみ子『大宣教時代の新宗教』実行社の場合に参照。
- (19) 中里介山作『大菩薩峠』に登場している。
- (20) 『新修 平田篤胤全集・第四巻』(名著出版)所収の該当箇所を引用。
- (21) 正木啓 著『東海と伊那』による。
- (22) 『阿智村誌』より。後日矢沢廣行氏からお借りした『実行録』を紹介する予定。

この中には柴田花守からの引用が多い様子である。

## 後記

- （一）本稿は『清泉女学院短期大学研究紀要』23号、24号、25号（二〇四〇〇六年）に発表した拙稿「三河民権国事犯事件と飯田地方の自由主義思潮（上・中・下）」の続稿である。即ち、（中）第二章「四、下伊那地方における実任教（実行会）の展開」の内容を詳述し、実任教と正理社の対抗関係に言及した。
- （二）以上四編の研究の結果、タイトルを「三河民権国事犯事件と発覚地飯田」と改めたい。以下に結論を要約しておく。

## 本研究「三河民権国事犯事件と発覚地飯田」の要約

通称飯田事件とは、明治一七年、名古屋の民権結社公道館の三河土族村松愛蔵、八木重治、川澄徳次らが、藩閥政府を批判する『檄文』を作成して印刷し全国配布する計画を進めていたが、秩父事件に触発されて民衆蜂起路線への変更を探っていたところ、一二月にそれが長野県飯田地方で発覚した国事犯未遂事件である。先ず一六年、川澄は漫遊して民権情報探索に出たが、その途路に飯田へ立ち寄り、当地で裁判所の勧解事件の代言業務などを行なう愛国正理社長桜井平吉と出会い、暫くこの地方に滞在した。

桜井は軽井沢出身、横浜で民権思潮に触れ、一五年に飯田に移住して正理社を開業。社員は推定二千余人。前『深山自由新聞』主筆で代言人の寄留者坂田哲太郎と共に訴訟、勧解事件の支援や、災難に対処する保険事業を行う一方、民権思想の学習会を開いた。一方、名古屋公道館の三人は一七年夏に東京に出て、およそ二ヶ月ほど自由党本部寧静館などで植木枝盛の稿本ほか諸資料を筆

写し、村松を主筆にして九月初旬までに『檄文』を作成している。

桜井は一七年八月、飯田の自由懇親会の弁士に自由党幹部を招く計画を企て、上京して村松ら三人と会った。翌日村松が同行して党本部へ出向きその口添えも得て九月月上旬に懇親会は実現した。桜井は三人を訪れた夜、彼らが行き詰っていた檄文の印刷につき、飯田の深山自由新聞社が印刷機を使用していたが今は休刊していることを話す。三河側はこれに大きく期待した。一方桜井の関心は常に懇親会実現のことにあり、両者は終始行き違っていた。

完成した『檄文』は、原稿の一部を植木枝盛が執筆したのかと思われるほど類似した語句も使用され、また植木の思想の影響が認められるが、その長さからは短期間に一人の筆者が書き上げたものとは考え難い。またその内容は多角的で鋭い政治批判である。八木は名古屋への帰途の九月飯田を訪れたが、期待した印刷機は銀行に差し押さえられて思惑が外れ、桜井の態度にも失望した。

同年一月、名古屋の公道館員は秩父事件勃発の報に接して、激論しながら全国の蜂起の動きに同調する可能性を検討した。三川の情勢を探った村松は慎重であったが、八木は興奮して、檄文末尾に衆蜂起の一句を付加し、先に滞在した飯田を想定して、正理社と名古屋公道館の一般方略案や軍令などを執筆した。

川澄はその写しを持って飯田地方を訪ねて情熱的に決起を訴えた。そのため当地において、密告によりことが露見し、一二月初旬に飯田、名古屋で関係者が逮捕された。翌年上記の者たちは発覚地長野県（松本の始審・重罪裁判所で裁かれ、有罪となった。

しかし飯田の地には、民権思想と運動が展開した形跡はない。